

少女雑誌の部屋から

少女雑誌の部屋だより「わすれなぐさ」リニューアル版を発行しはじめてからおかげさまで2年が経ちました。

皆さまにとって、少女雑誌はどのような存在でしたか？少女雑誌にまつわる思い出エピソードなどありましたら、ぜひお聞かせいただけますと嬉しいです。もっともっと皆さまに身近に感じていただけるような内容にするため、今後も知恵を振り絞ってまいります。どうぞご期待くださいね。



雑誌紹介 24

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

少女サンデー (小学館)

昭和35(1960)年9月号～
昭和37(1962)年4月号

『女学生の友』の姉妹誌として刊行された雑誌。季刊誌としてスタートした。キャッチコピーは「小さなマドモアゼルのためのおしゃれと暮しの雑誌」、「サブティーンの少女の夢をみたく読み物とグラフと付録」。途中で月刊誌になり、判型を変更しながら2年足らずで終刊し、幻の雑誌となった。

小説ジュニア (集英社)

昭和41(1966)年4月号～
昭和57(1962)年6月号

ジュニア小説を中心に構成された新しいタイプの雑誌。十代の恋愛をテーマのひとつにしており、少女たちから人気を博す。その成功を受けて、各出版社から次々とジュニア小説誌が刊行された。昭和57(1982)年、少女たちのための小説誌『Cobalt (コバルト)』として生まれ変わった。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 24

高橋 真琴 (たかはし まこと) 1934—

大阪府出身。(両親は山鹿市鹿央出身)

中学時代に雑誌『ひまわり』を見て中原淳一に憧れ、抒情画に興味を持つ。昭和25(1950)年、大阪市立泉尾工業高等学校色染科卒業、昭和28(1953)年、榎本法令館より『奴隷の女王』で漫画家としてデビュー。その後は大阪の日の丸文庫やあかしや書房などで貸本少女漫画を手がける。昭和32(1957)年、雑誌『少女』(光文社)にて「悲しみの浜辺」を掲載。以降、1960年代から80年代にかけて『なかよし』『マーガレット』『よいこ』などの少女誌、幼女誌の表紙・挿絵を多数執筆。文房具・日用品などのデザインも手がけた。

平成元年(1989)年、千葉県佐倉市に「真琴画廊」を開設。現在でも意欲的に創作活動を行い、個展以外にも雑誌表紙・ポスター等で新作を発表している。

少女雑誌の豆知識

～キラキラの秘密～

高橋真琴さんが描く少女は、大きくてキラキラした「瞳」がとても印象的です。天文学者になりたかったほど星が大好きな高橋さん。若い頃は宝塚劇場に通い、宝塚のステージを見て元気をもらっていました。舞台上に熱中する彼女たちの目がライトにあたってキラキラする。あの充実感いっぱい光を絵にしたい・・・そんな思いから、瞳の中に星をきらめかせようと、キラキラ瞳の少女を描くようになったのだそうです。評論家からは「瞳に星を入れる定番スタイルを“完成させた”」と言われています。